

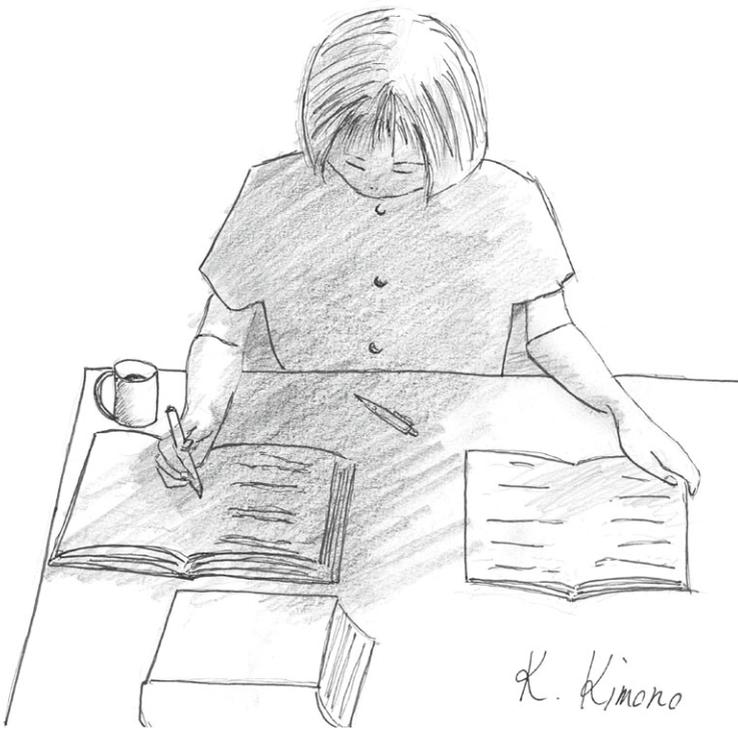
# 綴葉

ていよう

'21 10

No.401

あなたが創る生協の書評誌



## 話題の本棚

劉慈欣著、大森望、光吉さくら、ワン・チャイ、泊功(訳)『三体Ⅲ 死神永生』(上・下)  
野村喜和夫著『妖精DIZZY』

## 特集／翻訳

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seiyo/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/)

 **UNIV.** 京大生協  
CO-OP 綴葉編集委員会

# 仰ぐは星々の声、俯すは人々の光

## 三体Ⅲ 死神永生

(上・下)

劉慈欣著

大森望、光吉まぐら、

ワン・チャイ、泊功訳 早川書房



地球人よ、瞠目せよ。『三体』三部作の最終作。ついに、この物語に終止符を打つ時が来た。評者は本書の第一部・第二部と『綴葉』で書評してきた(三八一号・三九二号)。足掛け二年に渡る三部作の書評という任務を、この場に於いて全うしたい。

二〇〇頁・二十万年に渡る船旅

本シリーズの最大の魅力であり、また最大のハードルは、その物語の長さ・遠大さだ。三部作合計で五冊・約二〇〇頁。約二千年の時間が流れる。人類には着いていけないスケールだ。第三部にたどり着く前に船を降りてしまった乗組員を、評者は何人も見送ってきた。そこで、軽く第二部までの物語をおさらいしよう。

物理学者の父を文化大革命で殺された、葉文潔。彼女は人類に絶望し、とある軍事施設から宇宙に向けてメッセージを放つ。その想いを受け止めたのは、遠く離れた星に生きる「三体人」だった。人類より遙かに高度な文明を持つ彼らは、地球を滅さんと舵を切り出した。五百年後に迫る異星人との戦い。羅輯は、地球を救う「面壁者」に任命される。彼は無事に三体人の抑制に成功し、地球に平和が訪れたかに見えた……。これが前作までのストーリーだ。

ハードとソフトのラグランジュ点

一般に、SFの魅力は次のふたつの掛け算によって規定されるであろう。すなわち、設定(ハード)の完成度とストーリー(ソフト)の面白さだ。本書はハードとソフトの二刀流を実現している。三体問題、フェルミのパラドクスなど、科学の設定が惜しげもなく散りばめられている——その多さに読者がついていけないほどに——。では、本書は設定の遠大さで押し通すような、文字通りの「硬科幻」なのだろうか? 否。そのストーリーも超弩級だ。羅輯の後継者的役割「執劍者」を任された程心。彼女は二度、人類を救いそびれる。これ以上の失敗は許されない。罪悪感を胸に秘めたまま、彼女は遙か彼方の星に旅立つ——ヒトの種を残すために。ヒトの種を時くために。片や三体人はどうなったのか? 圧倒的な力に見えた彼らの存在も、この宇宙の中では塵の如き存在に過ぎない。彼らの滅亡を前に、人類はこの事実を知ることになる。我々の滅亡も起るのだろうか? その時、この地球に残された人類はまだ知らない。

設定とストーリーのラグランジュ点において——奇蹟的な均衡点において——本書は成り立っている。その特異性は、アジア圏初・翻訳小説初のヒューゴー賞を受賞したことによっても証明されている。本書の世界観を、著者の劉慈欣のメッセージを理解することは、果たして人類にできるのだろうか? 著者「三体」——読者の三者によって構成される「三体」。これらが為す運動を予測することは不可能だ。ニュートンにも、ポアンカレにも。一三七億年の宇宙の歴史の中で、今という私たちの時代——瞬きする時ほど一瞬の時間——に本書が生まれた奇蹟に、ああ、感動を禁じ得ない。(出席点)

(四三〇頁 税込二〇九〇円 5月刊)

## 困惑と幻惑・螺旋と感染・眩暈と蒙昧。

### 妖精DIZZY

野村喜和夫著  
思潮社



——螺旋階段を駆け上がる。足がもつれそうになりながら、同じ場所ぐるぐるして、位置だけが変わっていく。だんだん昇っているのか降っているのか分からなくなる。私の視界がぼやけていく。

わたしの ちゅうしんに  
めまいは ある  
けれど  
めまいの ちゅうしんに  
わたしは いない



本書を詩集とまとめるにはあまりにも異質だ。詩人・野村喜和夫の言葉がアーティスト・山本浩貴のデザインとレイアウトで表現されるBOOK1（緑）とその元となったテキストBOOK2（橙）で構成される本。一つの詩がレイアウトと色を変えるだけで、別の作品に生まれ変わることを見せてくれる。詩は音で楽しむと同時に目で愉しむことが出来る。光と音に触れながら目を瞑った時、臉の向こう側から、言葉が浮かび上がってくる。とりとめのない詞、意味の分からない詩、それでも余韻は私を誘ってくれる。

めまいとは すべてが  
まんなか となること  
きょう 死の  
うながしのように  
ひかり はげしいね



本を読んでいるだけなのに酔っぱらっていく。初めと終わりが分からない階段を彷徨うように、ページをめくっているのに進んでいる気がしなくなっていく。子供の頃の、くるくる回っているだけで楽しかった時間を思い出す。眩暈の追求に遊びがあった。

眩暈とは不意の孤独である。

たどりが着いた場所から遠くを眺めてみる。随分高いところまで来てしまった。螺旋階段の迷走は終わりを告げて、高所から下界を見渡してみる。流転する星女のように、世界が回っている。どこまでいっても眩暈が終わっていないことに気付く……。

きつと そらから  
めまいが おりてきて  
わたしを はこんでいるんだ

（きせいの）

（四一六頁 税込五五〇〇円）

5月刊

## 〈特集〉 翻訳

一体いつから翻訳という行いは始まったのだろうか。旧約聖書に伝え、人々が翻訳を始めたのは、主が人間の言葉をバラバラにしたバベルの塔の物語以降のことになる。以来、言葉を訳す中で、人はいつしかそのプロセス自体を愛おしむようになった。それは、機械翻訳が発達した今でも変わらない。そのことを今一度振り返った上で、考えたい。この不確かな翻訳という事象は、いったい何なのか、ど、勉強や仕事での経験ゆえに、翻訳は好き嫌いが分かれる話題かもしれない。しかし様々な目線から「翻訳」を扱う本特集は、定訳のない味わいを醸し出すものである。その妙味……どうぞ心ゆくまでご賞味あれ。(とよ)

## 翻訳の実践者たちが語ること

たとえば、カフカの『変身』を読むとする。

そして「これはすごい作品だ、カフカはすごい人だ」と唸ったとする。このとき私たちの視界に入っているのは、カフカその人と、カフカによって書かれた作品としての『変身』だけである。私たちはつまり、その背後に翻訳家が存在すること、そしてこの作品が彼の手になる翻訳書であることを忘れてしまっているのだ。優れた翻訳であればあるほど、私たちはそれが翻訳であることに気づかない。名訳は透明なのである。だとすれば、翻訳や翻訳家はその存在が忘れられることを仕事にしている、と言えるのかも知れない。しかし本特集では、そんな普段は忘れられがちな翻訳や翻訳家にあえて焦点を当ててみようと思う。暗がりにいる存在に光を当て、透明な存在に色をつけてみたいのだ。

### 翻訳の喜び

「美文を翻訳して原作者の現れ来れるかと思はしむる訳者は吾人之れをたゞへて如来と名づくべし」と書いたのは坪内逍遙であるが、以下ではまず、「現代の如来」とでも呼ぶべき二人の翻訳家による著作を紹介しよう。すなわち、村上春樹と柴田元幸による対談集

『翻訳夜話』（文春新書）である。

村上が冒頭でこう述べる——「机の左手に気に入った英語のテキストがあって、それを右手にある白紙に日本語の文章として立ちあげていくときに感じる喜びは、ほかの行為では得ることのできない特別な種類のものである」と。村上は翻訳することに無上の喜びを感じている。たしかに翻訳は時間がかかる。それは遅々として進まない。しかしそれでも彼は、「もっとも効率の悪い読書」である翻訳に取り組み続ける。物語の魂を自分のなかに引き入れるために、そして文章の秘密を探り出すために——「結局、自分で文章を解体して、どうすればこういう素晴らしい文章を書けるのかということを、僕なりに説明したいという気持ちがあったんだと思います。英語の原文を日本語に置き換える作業を通して、何かそういう秘密のようなものを探り出したかったのかな」。本書を読むと、無性に翻訳書が読みたくなる。そして何よりも、お気に入りの一冊を自分で翻訳してみたいくなる。

### 翻訳の苦しみ

村上と柴田は翻訳の喜びを語っているが、それと対照的に、翻訳の苦しみを語っている

のが、古井由吉のベスト・エッセイ集『私のエッセイズム』（河出書房新社）である。古井は今でこそ作家として知られているが、小説を書き始めるまではプロットやムーブの翻訳者として活躍していた。本書にはそのときの肉面的な格闘が描かれている。

たとえば古井はこう嘆く——「訳しにかかればいかにも晦渋な箇所も、こうして訳から離れて観すれば、一言一句簡にして明であり、あきらかに切りつめた精神の所産であることを感じさせ、それぞれがまた歯切れよくつながりあって、時間を躍動させ、深みを踏み分けて舞うような、軽快なほどの気韻も伝わってくるのに、さて訳文に束ねにかかると、また一段と晦渋の相を刻くのは、これはどうしたことがか」。簡潔にして明瞭な文章を試しに訳してみると、途端に晦渋なものとなる。翻訳の不思議である。古井にとって、翻訳とはまさに「泥道に重い荷車を引っばるような、なんとも難儀な作業」なのだ。

### 翻訳の為すべきこと

これまで見てきた翻訳家は皆それぞれ翻訳書を出版しているが、その背後にあって出版を可能にしているのが、翻訳出版に携わる編集者である。



そこで最後に、早川書房の編集者にして翻訳家であった常盤新平による回想記『翻訳出版編集後記』（幻戯書房）を紹介しておきたい。本書でとりわけ興味深いのは、常盤の訳訳に対する態度だ。彼によれば、誤訳はもちろん問題だが、それよりも問題なことがある。それは作中人物の情感が伝わってこないことである。彼は言う、アメリカのある女流作家が書いた小説の翻訳からは「女のかなしみ」が伝

## 機械翻訳時代における翻訳の倫理と遊戯

時に喜色を浮かべ、時に苦悩に染まる翻訳者の表情は、職人芸の奥深さを映し出す。その営みで近年注目を集めているのが、機械翻訳である。以下ではこのニューカマーの登場を導きの糸として、翻訳の諸相に迫ろう。

### 伝達する機械翻訳とその周辺

このテーマを扱う上で、『機械翻訳と未来社会 言語の壁はなくなるのか』（社会評論社）は示唆に富む。人文系の若手研究者が編んだ本論集の問いは副題の通りである。それに対し、同書は冷静な応答を試みている。例えば論者の一人西島は、機械翻訳の中に、諸言語の序列が潜み続ける危険を指摘する。大量の対訳データを精度向上に要する現代の機械翻訳は、正に無意識に、英語などの特定の

わってこなかった」と。正確に訳すこと以上なのが翻訳には求められている。訳者は訳文に工夫を凝らし、そこにかなしみを纏わせねばならないのだ。これこそ翻訳の為すべきことなのだろう。

本章では翻訳家に焦点を当ててみた。しかし今や時代は変わりつつある。翻訳の主体は人間から機械へ移り変わろうとしている。本章ではこの変化に目を向けてみよう。（ばや）

言語の特徴ばかりを訳文に反映させかねないという。各論者は、機械翻訳が国際的な意思疎通に有用であることを認めた上で、それに付随する問題を見逃さない。

また、同書には専門家からの真摯なコメントと、それに対する寄稿者の応答が付されている。真剣な対話から紡がれる議論は、機械翻訳の歴史的展開を踏まえ、情報伝達に留まらぬ翻訳の成分に気付かせてくれるだろう。

### 「異なるもの」を「異なるもの」のままに

異文化の侵略は、機械翻訳以前の翻訳にも存在した問題であり、フランスの翻訳家ベルマンの研究主題であった。彼は『翻訳の倫理学 彼方のものを迎える文字』（晃洋書房）において、外部の文化を丸ごと自国語の価値

観で上書きしてしまう「自民族中心主義的」翻訳を批判した。そうした長年優勢であった翻訳形態に対し、ベルマンは「文字の翻訳」を提唱する。自国語と等価足り得ない他文化の文字に潜む伝統、意味の重層性を尊び、節度を保って自国語の中に迎え入れることが、「文字の翻訳」が求める倫理なのである。



ヘルダーリンやシヤトーブリアンらの翻訳実践を例示しながら、同書は、「原典の起源の顕れとしての翻訳」についての経験と反省を促している。それは、自国語の中の誤訳珍訳という問題とは大きく異なる、翻訳の実相への倫理的な接近であり、非常に興味深い。

#### 倫理的、かつ遊戯的な翻訳？

ベルマンが考慮した文字の歴史性は、当然日本語にも見出せる。例えば「彼」という漢字は、明治期の翻訳語としては英語の he と同義であるが、原義はそうでない。「彼方」などの語に名残がある通り、「彼」には元来心理的な「遠さ」のニュアンスがある。面白いことに、既知の人物を指す西洋の人称代名詞とは真逆の特徴である。この知見を踏まえ齋藤由美子は、二〇一五年の論文で多和田葉子の「変身のためのオビウム」(『変身のため

のオビウム／球形時間』所収、講談社文芸文庫)を論じている。この小説は、ドイツ語で書かれた作品を、作者自らが日本語に訳したという成立事情をもつ。齋藤は、過去作において多和田が「彼」をよそよそしさの表現として用いていたことを指摘した上で、その心理的「遠さ」が、同日本語訳では、不安定な「波」のイメージと、字形の類似性に基づき関連付けられていると読解する。

彼女の解釈を踏まえると、同作の「第十六章 ポモナ」の面白みが顕れてくる。ポモナは老女を好む女性で、老婆を演じる姿を気に入り、一人の「彼」と親密になる。「彼」は老「婆(波十女)」に似ている。だから「彼女」は彼に安らぎを感じるのである。つまり本小説では、個々の漢字は明治以降の近代的な用法から解き放たれている。そして原義のもつ意味と、視覚的類似性に基づく言葉遊

## 翻訳はなぜ哲学の問題になるのか

名のある文学者たちの生業であれ、機械的処理の結果であれ、ある言語から別の言語への「翻訳」作業に動員される辞書や文法書の存在は所与のものである。これらほかに、言語学者たちの血の滲むような努力の結晶だが、ここでそんな努力を注視したとき、私た

びの引力によって、詩的な物語が紡ぎ出されている。もっとも、多和田の翻訳から生じる文字との戯れは、歴史を通り、語の原義を尊ぶという点で倫理的でもある。しかもバイリンガル作家である彼女の場合、母国語が「異なるもの」となるという転倒が生じており、そこに可笑しみすら感じられる。このように倫理のかつ楽しさの溢れる多和田の言葉からは、翻訳の多様な可能性が伺えよう。

機械翻訳の技術向上により、情報伝達としての翻訳が手軽になりだした今こそ、伝達ではない翻訳行為(ベルマン)の独自性が輝きを増し、翻訳の無限の可能性を探る作家(多和田葉子)の魅力が一際光を放っているのではないだろうか。このように話をまとめた上で、最後にこうした考察を人に要請する翻訳の「不確かさ」について、理論的視座から検討し、本特集の締め括りとしよう。(六七)

ちはある問題圏に突入する——「翻訳の不確定性」に端を発する、一連の問題圏である。

#### 「ガヴァカイ」と根本的翻訳

ある未開の民族の言語について研究するフールド言語学者が、この言語のネイティブと接触する機会を得た。あるとき、ネイティ

プはこの学者の前で「ガヴァガイ」という単語を発した。ちょうどそのとき、彼らの前にはうさぎが姿を現していた。果たして、そこに現れた現地語「ガヴァガイ」は「うさぎ」と翻訳してよいものだろうか……。

このエピソードは、分析哲学を代表する哲学者のひとり、クワインが『ことばと対象』に持ち出した事例である。「根本的翻訳(radical translation)」と呼ばれる、このような翻訳の臨場的事例を通じて彼は「翻訳の不確定性」を導いた。富田恭彦が『アメリカ言語哲学入門』(ちくま学芸文庫/絶版)にまとめているようにこのテーゼは、「同一の手掛かりを基盤としても翻訳は、意的に定まらない」とするものである。たとえば先の「ガヴァガイ」が現地語と認められたとして、その「うさぎ」という翻訳は「可能な多くの翻訳の仕方の一つにすぎない」。極端なことを言って、我々がその辺りを飛びまわる長耳の小動物を指して〈うさぎ性〉の一事例であるとも言いうるように、先の「ガヴァガイ」が、私たちの言う「うさぎ」以外を指示する可能性は、大いにありうることである。

#### 根本的翻訳から根底的解釈へ

この「根本的翻訳」に関わる話題は、やがて「解釈」の問題に拡張される。以下、クワインの高弟デイヴィッドソンが導入した「根底的

的翻訳(radical interpretation)」を、『言語はなぜ哲学の問題になるのか』(勁草書房)におけるハッキングの叙述から紹介しよう。

このアイディアは「お互いにもったく見ず知らずの二人の外国人が、互いの言語の知識がゼロの状態から、相手の言うことを理解してゆこうとするモデルのこと」である。両者は相手の用いる単語の意味を推測し、抱いている信念の「解釈」に努める。しかしここで、相手の真意を引き出すこの手続きが、彼らが同一言語を用いる場合にも採られることに注意したい。だとすれば、言語を越えたコミュニケーションと同一言語内のコミュニケーションとの間の違いを、私たちはいかに表現できるだろうか。いや、そもそも〈互いに話している言語が同一である〉ということはいかに特徴づけられるだろうか。ここで問題は、同一言語内で他者を理解することまで拡張される。クワインが翻訳について提示した事例は、ここで、私たちのありふれた日常実践にまで深い影を落とすこととなる。

#### 言語が満たす要件としての翻訳可能性

一方デイヴィッドソンは、翻訳というものに関連して特異な言語観を抱いていた。曰く、〈翻訳不可能な言語〉という想定はそもそも矛盾概念である。およそ言語たるもの、それは相互に翻訳可能で、そもそも翻訳不可能な

ものなど言語でない——このアイディアの理解には、野矢茂樹の『語りえぬものを語る』(講談社学術文庫)が大きなヒントとなる。

ここで仮に、いかようにも翻訳できない言語的活動を想定してみよう。どうやらこの〈言語〉の話者は、それを用いて自身の経験や世界のあれこれを語ろうとしているようだが、私たちはそれを自分たちの言語に翻訳できない。通常私たちは日本語のような、特定の共同体や文化に内在的な視点を通じてしか世界を捉えられない。このとき、広く全世界を俯瞰するような〈神の視点〉から何かを語ることはそもそもその禁じ手だが、一方どんな内在的な仕方でも世界を語るとしても、言語で切り出される原質としての世界は、言語を貫いて共有されるべきものである。こうして言語の壁を越え、世界を語り出すことのできる共通の地盤が用意されるとき、言語は相互に翻訳可能なものとなる。と同時に、この構図を満たさない世界の語り方を、私たちは「言語」として容認できないのである。

\*

ここまで、実践・歴史・理論という点から翻訳の諸問題を論じた。もちろん翻訳にまつわる論点はこの三つに尽きないが、翻訳について考え直すきっかけを読者が得たならば、評者一同、これ以上の真心はない。(八雲)

## 新刊コーナー

伝わるデザインの基本  
増補改訂3版  
よい資料を作るためのレイアウトのルール  
高橋佑磨・片山なつ著 技術評論社



ようやく卒業論文を書き上げた。でも卒業発表会ではそれをスライドにしたりワードに短くまとめたりして発表しなければならぬ。とりあえず文字で埋め尽くした資料を作った……ではダメなのだ。今すぐ本書を手に取り、「伝わるデザインの基本」を学ぼう。

簡単にデザインを学べることを謳う類似の本は数多ある。しかし、どうすれば読みやすく見やすい「伝わるデザイン」になるのかを分かりやすく教えてくれる本は非常に少ない。著者はその問題を指摘し、「デザイナーではない」人々のための「デザインの教科書」を目指し、本書を著している。そのため章立ては至って基本に忠実であり、資料作りのミクロな単位からマクロな単位、そしてプラスαとしてのレイアウトと配色へと移っていく。「書体と文字の法則」を学べば、まずどのようなフォントを選ぶべきなのかが学べる。

次に「文章と箇条書きの法則」を学べば、目的に合った大きさの文字を可読性の高い行間で並べられる。続けて「図とグラフ・表の法則」を学べば、分かりやすい図を入れられる。「レイアウトと配色の法則」を学べば、図を含む文章の中でより強調したい点を明確にできる。これらの基本を忠実に守れば、芸術的ではなくとも、きちんと「伝わるデザイン」の資料ができていくだろう。

学振の申請書や会社での資料作成にまで役立つ続ける「デザインの教科書」として、本書を持っておきたい。(石透)

(二五六頁 税込二七八円 4月刊)

### 習慣超大全

BJフォッグ著 須川綾子訳  
ダイヤモンド社



「AしたらBして  
すぐ褒める」——こ  
れが本書の結論だ。

「英語の勉強をした  
い」「筋トレしたい」「飲酒をやめたい」などなど、習慣にまつわる悩みは絶えない。そんな悩みに、本書は終止符を打つ。

著者のフォック氏曰く、人の行動は、次の

三つすべてがそろった時に起こる。すなわち、モチベーション・能力・きっかけ。氏は習慣化の一番の近道は「きっかけ」をコントロールすることだという。本書には「フォックモデル」なる行動モデルを用いながら、人が習慣を手に入れる（あるいは手放す）ためのメソッドが、事細かに記されている。

本書で紹介されているメソッドを二つ紹介しよう。「AしたらBしてすぐ褒める」——冒頭で紹介したものだ。この一文に、習慣化の秘訣が詰まっている。「AしたらBする」というメソッドは、巷では「habit」と言われるように、よく知られたものである。しかし、フォック氏はそれに止まらない。すなわち、「すぐ褒める」という行動を加えている点が新しいのだ。氏曰く、人は自分にとって快を感じる行動しか習慣化できない、という。「A」と「B」という二つの行動を結びつけた上で、「B」ができた瞬間に自分を祝福することで、その行動が習慣化しやすくなる——ここがミソなのだ。

メソッド本は読むためだけでなく、実践するためにある。ただ読むだけなら時間の無駄だ。この書評を読んだ(A)あなたは、次にどんな行動(B)を起すのだろうか。おっと、自分を褒めるのを忘れずに！(出席点)

(五五〇頁 税込三三二〇円 5月刊)

## ウイステリアと 三人の女たち

川上未映子著  
新潮文庫



世の中的には、川上未映子と云えば芥川賞受賞作の『乳と卵』とか、最近文庫化された話題作『夏物語』なのだろうけれど、そして私がかろうじて読んだことがあったのも『すべて真夜中の恋人たち』だけだったのだけれど、ある友人に薦められて手に取ったこの短編集も読み応えのある作品として、思い切って取り上げてみることにしよう。

本書は、それぞれ独立した四つの物語を収める。トリを飾る表題作では、子どもに恵まれない、夫との関係も冷え込みはじめたひとりの女性を主人公に据える。藤の木の植わったはず向かいの屋敷は解体作業も進み、そういえば家主らしき老女の姿も最近は見かけない。作業が中断された屋敷をほんやり眺めていたある日、不思議な風貌の女が主人公に話しかける。女曰く「じつはわたし、ときどき空き家に入るんですよ」——まるで彼女からそのかされたように、大屋敷に侵入していく主人公。解体の手を免れていたある一室で、彼

女は屋敷の主へウイステリアンがひとりの女性とともに歩んだその半生を自撃する……。

表題作以外にも、ある過去の「記憶」を失ったまま中学の同窓会に向かう女優、突然手にした大金を元手に毎日デパートへ通う女性など、各作品の登場人物はその華やかさの裏にどこかに暗い影を落としている。と同時に、あまりに冗長な文章を織り込みながらも淡白な文体は、読む上でのストレスを感じさせない。形式/内容の両面でアンビバレントな物語世界——はじめて手に取る川上未映子作品としても十分にお薦めできる。(八雲)

(一九〇頁 税込五三九円 5月刊)

### 岸恵子自伝

卵を割らなければ、オムレツは食べられない

岸恵子著 岩波書店



最初に言おう。岸恵子は、ずっと私の「憧れ」だった。スクリーンを自在に遊

ぶする彼女を初めて目にした時、私は一瞬で恋に落ちた。けれど恋とは複雑怪奇、もっと彼女を知りたいという欲望は、あまり知れないという感情に容易く組み敷かれる。私

は彼女の映画を観ることに専念した。だから本書を読むのは「踏み絵」が如き体験だった。

本書は横浜での幼少時代から始まる。それは戦前の明るく洒落た生活ではあったが、随所に「死」や「別れ」の予感も見てとれる。ラジオが伝える二・二六事件、美丈夫だった祖父の急死、ハーフだった少女との戦争による別れ、そして横浜空襲。死と隣合わせの体験は否が応でも彼女を「大人」にならしめた。

この次には若き女優時代の体験が綴られる。美空ひばり、木下恵介、川端康成、ジャン・コクトーら名立たる面々との交流は、知られざる世界を覗くようでスリリングでさえある。だが本書の魅力は、後半部の「国際ジャーナリスト」としての彼女の体験にあると思う。

フランスに嫁いだ彼女は、人種や文化を強く意識し始め、世界を見ようと遊弋する。革命前後のプラハ、イラン、パレスチナ。身近に死を感じながら、同時に彼女は歴史の重みを身体で受け止め、日本に報道し続けた。当時の心情を丁寧かつ正直に、決して奢ることなく彼女は書き綴る。そこには現代社会を考察する上でもなお有益な点が見出せるだろう。

本書は女優、ジャーナリスト、作家としての岸の魅力が溢れている。最後に言おう。岸恵子は、ずっと私の「憧れ」である。(リンダ)

(三三〇頁 税込二二〇〇円 4月刊)

## 牧師、閉鎖病棟に入る

沼田和也著  
実業之日本社



衝撃的なタイトルである。最近ではケアなどの話題に関して少しずつ取り上げられることも増えてきたかもしれないが、一般的には精神病院というものは身近ではないだろう。著者は宗教者という立場で精神病院への関わりは強いほうだった。しかし、そんな彼にも自分がその中の住人となることは予想外だったらしい。

さて、閉鎖病棟の中は？ すべてが監視され、自由のない世界だ。決められた食事、決められた間食（選択肢はあるが）、決められた作業。制約の中で自分を見つめ直す、それは社会を知る著者には苦痛な日々だった。ある日、彼は夕日を眺める。外の世界で見た時よりも少し遠く、でも美しい夕日。彼は思わず言う、「美しい」と。けれど彼の隣に立つ少年は首を傾げる。彼には「美しい」という感覚がわからないのだ。人懐っこく著者と話をしたがる少年。けれど彼は逆上して妹を殴る人でもあった。著者の読書姿を見て自分も

と勉強に努める少年、けれど彼の学力は小学校程度だった。彼だけではない、「普通」になれない人々がそこで生きていた。彼らにとって著者は「普通」の側からの一時的闊入者だったのかもしれない。彼らを通して著者は自分のそれまでの行動も「普通」の側に立っていることを前提とした一面的なものではなかったか、と省みるようになる。

著者のような人もまっかげがある。「普通」から外れる、というよりも今の「普通」とは案外脆いものなのかもしれない。そんなことを考えさせられる一冊だ。（ねこ）

（二二三頁 税込一四三〇円 5月刊）

## 貝に続く場所にて

石沢麻依著  
講談社



東日本大震災後、『遠野物語』が読み返されたという。たどきは、夜霧が立ちこめる夏の渚で男が、明治三陸津波で死んだ妻に出会う話。死と折り合おうとする生が幽霊譚を求めるのは、いつの世も変わらぬことだろう。

今年上期の芥川賞を受賞した本作の舞台は、新型感染症が蔓延する2020年夏のドイツ・ゲッティンゲン。著者と同じく西洋美術を研究する留学中の女性主人公が、仙台での大学時代に津波にのまれて行方不明になった後輩の幽霊に遭遇する。

意表を突かれたのは、主人公が「残された者」と言えるほど後輩と特別な関係をもたない点だ。親友でも恋人でもなかった間柄にはさし当たり、幽霊と会う理由がない。では、なぜ「彼」は九年越しに現れたのか。象徴的な問いをめぐる小説は過剰なまでに緻密に組み立てられる。二〇億分の一の縮尺で街路に置かれた惑星模型や、キリスト教美術の画像学、「月沈黙」という歴史的表記が醸すイメージなど、知的な趣向が次々登場するさながら驚異の部屋は読んでいて愉しかった。

やがて主人公たちは、惑星の幽霊とも称すべき冥王星のオブジェを探して夢幻的な散策に繰り出す。物がなくなろうとも声は残り続け、声がひしめき合い過ぎた沈黙が辺りを占めたままとなる。沈黙とは、生と死のどちらからともなく響く「メント・モリ」という静かな祈りだ。日常が忘れさせる災禍の記憶をたどり、幽霊の意味に向き合った意欲作である。

（二六二頁 税込一五四〇円 7月刊）  
（投稿・SK）

## 外傷性ひきこもり

日本の複雑性PTSDへの

支援と治療

宮田暁治著 星和書店



未だにわからない。  
私はなぜ、「ひきこもり」にならなかつたのか。

親子関係が、子供にとって生きる世界を支える基盤であることは、誰しもが身を持って知っている事実であろう。著者は、平凡な親子関係の中にも、トラウマにつながるような不適切な関わりが発生し得ることを指摘する。

本書は、個人のパーソナリティ形成から日本文化の構造まで、射程広く問題を絡めながら、「ひきこもり」と親子関係の因果を探っていく内容となっている。日本の親子関係が、「縦の関係」から「横の関係」へと移行しつらうく、支配関係になりやすいこと。親の統制的な関わりによって、子供の中に醸成される強い規範性や一方通行のコミュニケーションへの慣れが、社会へ出る上で妨げになってしまふことなど、「ひきこもり」の心性を理解する上で重要な多くの考察がなされている。

では、不適切な養育を受けつつも、なんとか社会に出ている人々と、「ひきこもり」の

人々との差異は、どこにあるのだろうか。著者は、その答えを人間の記憶に求める。我々は、「死」を回避するためのトラウマ記憶だけではなく、「生」の喜びを感じた記憶によっても突き動かされている。この「生」と「死」の記憶のどちらに依拠しているのかわかるといことが、一つの岐路になるのだ。

あの頃、なぜ「ひきこもり」にならなかつたのか。目を閉じ、漠然と考える。臉に浮かぶのは、息を殺し昼夜眺めた、汚い画質のライブ映像。それがどうしようもなく好きだったことを、今確かに思い出した。(まじゆ)

(三二八頁 税込二六四〇円 9月刊)

## 記憶と人文学

忘却から身体・場所・もの語り、そして再構築へ

三村尚史著 小鳥遊書房



二〇世紀後半、人文学では「記憶」をテーマとする研究書が数多著された。

「記憶の場」や「集合的記憶」などは当時広く浸透したタームだが、今なおよく耳にする。と言うよりは、長い戦後の終焉、震災、コロナと度重なる「異変」により自らの実存も危

ぶまれる今なればこそ、「記憶」は一層切実な関心事なのだろう。「記憶」と向き合いたい、そんなあなたに薦めたいのが本書である。

著者は日本の「記憶」研究にて第一線で活躍する研究者だ。本書ではこれまで国内外で築かれてきた研究史を概観し、五つの要点を取り上げ論じていく。すなわち、①呼び覚まされる過程で記憶が補正されてしまふ「再構築性」、②どれほど曖昧であっても記憶を真なる証拠と見做したがる「真正性」、③身体が記憶を呼び起すトリガーとなる「身体性」、④個別の記憶が特定の場所を介して集団に共有／継承される「集合性」、⑤記憶の宿敵と目されてきた「忘却」である。これらの要点を彼は、歴史学、心理学、脳科学、建築学にまで目を配りながら論じていく。更に、本書の優れた点は、引用される文学／映画の幅広さにも存する。記憶と言えばブルーストは御馴染みだが、それに加え小川洋子、カズオ・イシグロ、テッド・チャン、新海誠など最近ホットな作家をも分析対象としている。つまり本書は単に「記憶」を学ぶための入門書であるばかりか、現代文化の便覧としても有益なのである。

大変読み応えのある本だ。一読でその内容を覚えてしまふのは困難なはず。否、それでこそ「記憶」の入門「所」だろう。(リンダ)

(二二六頁 税込二四二〇円 5月刊)

## 資本主義だけが残った

ブランコ・ミラノヴィッチ著

西山美樹訳 みすず書房



二大国間の冷戦は、アメリカの勝利、すなわち資本主義陣営の勝利と共に終焉した。しかし、著者の見解によると、現代ではアメリカと中国の間で資本主義どうしの対立が起こっているという。前者は、万人に機會の平等を保障するが、能力による富の格差は認めるのに対し、後者は、出る杭は打たれる方式で、国家が柔軟に法を用いて資本家を抑圧する。それぞれを「能力リベラル資本主義」、「政治的資本主義」と名付け、両者の特徴や矛盾点、限界点を明らかにする。

本書では、米中双方が抱える喫緊の課題として、不平等の拡大と腐敗の進行を挙げる。経済学者である著者は、実現可能性にまで言及しながら、それぞれに必要な経済政策を提示する。しかし、人々の欲を掻き立てる資本主義の仕組みは格差を避けられない。また、グローバルイズムの進展によって簡単に国外に資本移動ができるため、腐敗が今後も常態化する可能性は大いにある。現時点では新しい

システムの創造はありえないといった、悲観的ともいえる現実主義的立場から、斬新な世界の見方や今後の資本主義の可能性が示される。こうした著者の論理は非常に興味深い。国内や国家間の不平等の問題の所在を正しく理解するためにも、一読を勧める。

とはいうものの、読了後に結局「資本主義だけが残った」ことに納得するだけではいけないだろう。我々が理想とする社会は修正した資本主義にあるのだろうか。違つたらば、どんな社会が望ましいのか。論争的でもある本書の主張はどう向き合おうか。(トントウ)

(二六〇頁 税込三九六〇円 6月刊)

### 増補新装版 他者への自由 公共性の哲学としての リベラリズム

井上達夫著 勁草書房



リベラリズムとはなんだらうか。著者・井上達夫はリベラルにとって自由以上に正義の重要さをとく。それは自由という概念が、他者の自由を否定してしまう危険性を孕んでいるからだ。こうした自由と権力の問題を痛烈に暴いた

のはニーチェであった。「意志の自由」といわれるものは、本質において、服従せねばならないものに対する優越の情動なのである……『私は自由である、(彼)は従わなければならない』と。他者の干渉から自由でありたい、自分自身の思うように人生を設計し世界を適合させたい……こうした自由が持つ飽くなき意志こそが、専制への淵源である。そうであるならばリベラリズムは権力だけでなく、自由を批判しなくてはならない。

そこで重要となるのが他者である。≒他者からの自由 から「他者への自由」へ」という提言は、他者の視点から批判を受け、自己を晒していく精神の開放性こそが自己の成長にとって重要なのだという視点を与えてくれる。人は他人の支配に対しては過敏であるが、自己の支配に対しては鈍感である。偏狹で独善的であればあるほど、そうした価値観に安住していたいという欲望に支配されてしまう。自己の牢獄から、解放してくれる存在こそが他者であり、だからこそリベラリズムは普遍主義的に他者の権利を尊重する。

九九年に出版本の復刊だが、未だに本書の重要性は喪われていない。いや、ホームレスが嘲笑され移民が不等に扱われる社会において、今こそ本書は読まれるべきだ。(きもの)

(二〇八頁 税込三三〇〇円 4月刊)

ケアとは何か

看護・福祉で大事なこと

村上靖彦著 中公新書

著者の村上靖彦は現象学を専門としているが、医療福祉現場において二〇年近く調査研究を行ってきた。それらの研究には「ケアとは何か」という問いが常に含まれている。

著者はケアを「人間の弱さを前提とした上で、生を肯定し、支える営み」だという。その定義のもとでは「他者を支える」全ての人々がケアラーとなる。そのため、本書に登場するケアラーは看護師や介護師などの専門職だけでなく、親と子、ヤングケアラーなども含まれる。著者は本書ではあえて、哲学者の概念などには深入りせず、ケアをめぐる人々の圧倒的な語りを紹介し続けた。例えば固形物を食べられなくなった終末期の人の「プリンを食べたい」という思いをめぐる語りは、本書でケアの本質の一つとして挙げられる「小さな願い」の大切さを、こちらのからだどころを揺るがす衝動と共に伝えてくる。

本書では医療と福祉を横断した語りと、それらをつなぐシンプルなケアの本質が提示される。「ケアとは何か」に対するあなただり

の答えを探りながら読んでほしい。(石透)

(二四〇頁 税込九二四円 6月刊)

小説読解入門

『ミドルマーチ』教養講義

廣野由美子著 中公新書

恥ずかしながら評者は、これまで読解法など受験勉強以来知ろうともしてこなかった。しかし、小説テキストの仕組みを分析する方法を知ることが、小説をより深く読むために重要であると著者はいう。

本書は、技法編と読解編の二部構成をとっている。技法がどのような影響を物語に与えているのか、また、宗教や社会といった切り口から作者は何を考え、何を伝えようとしているのか、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』を題材に紐解いていく。著者の「教養講義」が示す更なる読みの可能性に、読者はきっとわくわくさせられる。

長編小説が苦手な諸君、本書の前にあの長編小説を先に読まねば……と尻込みしないでほしい。本書を手に取り、小説の愉しみ方を知ったら、自然と読みたくなるに違いないのだから。全四巻の『ミドルマーチ』(光文社古典新訳文庫)は、本書の著者廣野由美子が翻訳している。社会背景や人間模様が緻密に描かれたイギリス文学の傑作である。本書読後にはぜひ参照されたい。(トントウ)

(二七三頁 税込九九〇円 4月刊)

9条の戦後史

加藤典洋著  
ちくま新書

憲法九条の戦後史を丹念に追うことで、現代における九条の活かし方を提示する本書は、日本に住む全ての方にお薦めである。

本書における加藤典洋の姿勢は、『敗戦後論』から一貫している。誤り得るかもしれない自己から出発して、その思考を広げていく姿勢、そして、「ねじれ」から目を背けない姿勢である。それ故に、加藤は、米国への従属により踏みじられる沖縄や福島の人々(ねじれ)が視界に入らない親米保守に批判的であり、九条の平和主義という外来思想から議論を出発する護憲派にも批判的である。

「理念の高遠さと実行のリアルさが拮抗していることが大事」(一七八頁)と考える加藤は、九条を統整的理念としつつも、他国に從属しない安全保障の実現を模索し、最終章で護憲的改憲案と安全保障政策を提示する。それには賛否両論あるだろう。しかし、重要なのは、自らの頭で徹底的に考え抜き、「ねじれ」からも目をそらさない加藤の誠実な姿勢だ。これこそ本書を通して加藤が遺した最大の贈り物であろう。(投稿・行人)

(五五五頁 税込一四三〇円 5月刊)

## それはまごとか幻か

先日、偽史をテーマに誌面で本を紹介した。創作でありながらあたかも歴史事実を述べているかのように語る史書の存在を知ってくださった方もいることだろう。さて、そのような書物は歴史だけではない。ということでも今回は虚実混ざり合ったものというのを紹介しようと思う。

## 【紀行文】

歴史書に似て紀行文・旅行記には創作談を紛れ込ませることが可能である。有名なものでは『東方見聞録』の黄金の国「ジパング」は、事実とは異なる記述で日本が描き出されてきたわけだ。ところで日本は実在する土地に関しての風聞として書かれたわけだが、実在の土地について全くの創作として書かれた地誌を挙げよう、『フォルモサ



台湾と日本の地理歴史』（平凡社ライブラリー）はフォルモサ人のジョージ・サルマナザールが自らの故郷について紹介するという体裁の書物である。当時、ほとんど知られていない台湾、そして日本についての貴重な証言として驚きをもって広く読まれた地誌である。ただし、全くの嘘。著者のフォルモサ人というのも只の自称である。内容の奇想天外さは読んでのお楽しみ。この書物に着想を得て、後に有名な架空旅行記『ガリバー旅行記』が書かれたとのことなので、嘘からフィクションが生まれる一例といえるだろうか。この書物や著者の出自に関して詳しく知りたい人には『パンヴァードの阿房宮 世界を変えなかった十三人』（白水社）をおすすめする。この本の中には他にも偽シエイクスピアなど驚きの逸話が載っている。

## 【文学】

偽史の時に述べたように、偽史の書というのは事実であると言われる史料が捏造である。これの文学バージョンとして、ノンフィクションとされるものが実は全くの創作であったことが判明する場合がある。有名なものとして『ホルトガル文』を挙げよう。この書物は昔時の修道院の尼僧から恋人に送られた手紙の発見として大いに評判を呼んだ。しかし実際のところは、発見者とされる人物による創作だったことが今日ではほぼ定説となっている。ただ、この書物先駆けとなつて書簡体小説という形式が文学創作の一ジャンルとして生まれたのは興味深い。他にもスコットランドの伝説を謡ったものとされる『オシアン』には発見者マクファーンソンの創作部分かなり混ざっているといわれている。

こうしてまごとかフィクションであることが文学の生まれる契機となっているわけだが、物語世界のまごとかをライクシオンに変えてしまうという形式が現代になって生まれてきた。いわゆるメタフィクション小説である。その代表としてイタロ・カルヴィーノの『冬夜のひとり旅人』（白水）ブックスを紹介して終ろう。小説を読み出した読者はそれが乱十本であることを知らされる。中断した小説の先は……全然別の作品？。「あなた」と呼びかけられる本書の読者は、作者が書くままに小説の続きを求めて物語世界のなかで冒険する。そしてそこで遭遇する細切れの作品は、それらを作り出す剽窃作家の偽作者の存在を浮かび上がらせる。さて、浮遊する小説のオチは一体……。堅固な現実世界から幻の断片が連なる虚構世界へ。カルヴィーノの作品を読み終わったら現実へお帰りください。（ねい）

## 「建築」の和解を目指して

『建築家』がつくる建物って、奇抜だけど何が良いのかいまいち分からない。「もっと『普通』の建物でいいのに。」ある友人にこんなことを言われた。さらに、設計者が「どうせ『一般』の人には伝わらないから」とほやくのも聞いたことがある。

建築は誰もが関わっているものなのに、作り手と使い手の間で分断が生じている。この悲しい現状を乗り越えるために、建築家が書いた二冊の本を紹介する。建築家だけでなく、その建築に関わる全ての人によって生まれる、空間の可能性について考えていきたい。

### 使い手が作り手の意図を超えること

まず、現在京セラ美術館の館長を務める、青木淳の『原っぱと遊園地』（王国社）を紹介する。彼は本書で、ある美術館で行われた個展を批判し、廃校となった小学校で行われた展覧会を評価している。美術館は、展覧会のための空間として設計されすぎていたのだ。どこに作品を展示し、訪問者がどのように鑑賞するのかがあらかじめ決められていた。一方小学校は、展覧会とは関係のないルールで設計されている。だからこそ、作家達は作品を魅せるための能動的な工夫を行うことができた。

次に青木は、自身が手がけた「ルイ・ヴィトン表参道」「潟博物館」などの事例を挙げ、その設計過程を振り返る。著者は常に、あらかじめ人の行動が想定された建築（「遊園地」ではなく、昔のアニメで描かれる「原っぱ」のような、人々の自由な使い方によって空間が作られていく建築を目指している）。

「原っぱ」とは設計の意図が失われた空間なのに、それを「設計する」と言うのは矛盾している。設計者は完成した建築に手を加え

ることができないからだ。竣工した後の建築は、使い手に丸ごと託されている。そう考えると、自分自身と「建築家」との間に繋がりが見えてこないだろうか。そして建築を訪れその感覚をより具体的に実感できたときに、「原っぱ」への一歩が踏み出される。

### 「建築」とは自分が生きる世界について考えること

『建築の難問』（みすず書房）は、建築・土木・都市の分野を横断し活躍している内藤廣による問答集である。内藤さんらしい嘘のない言葉で、「建築」の問題点や可能性が語られる。

著者は「建築」がbuildingのみを指す言葉として広まっていることを指摘している。都市計画や土木なども含めて建築なのに、建物だけの問題として扱われる状況が生まれている。本来の「建築」とは「人間が生きていく世界をどう構築するか」という意思を表す、全ての人に関わる広い概念である、と著者は言う。

江戸時代の日本には、またそのような感覚があった。お茶を飲みに来た大工さんとの世間話で、一般庶民も建築の全体像を知っていた。最近近所にできた建物に文句を言ったりして、「建築」が自分の生活の一部であるという感覚を皆が持っていた。ところが明治以降になると、スピード重視の建設が求められるようになる。高度経済成長や震災など、世の中が目まぐるしく変化する中で、上位下達の「建築」が主流になり、他の分野との間に亀裂が生じていった。

このような状態を和解に導くのもまた、「建築」であると著者は考える。建設されるまでもその後も、建築には膨大な数の人々が関わっている。出来上がった建築をみんなで喜び合えることができれば、その時「建築」の本質的な価値が生まれるのだ。

（茫漢）

## 編集後記

人生は死の連続だ。学校を卒業する。サークルを引退する。恋人と別れる。コミュニティの終わりは、もはや死に等しい。大学生の「わたし」は、余命半年だ。残された時間を、私はどう生きるのだろうか。

小学校の友人が、突然京都を訪ねてきた。出張。パソコン1つで仕事をする友人の姿は、どこか眩しく見えた。聞けば、小学校の同級生が結婚したそうだと。遙か遠くの故郷の話に現実味を覚えられず、「へえ……」と気のない返事をした。彼らにとっては、私はもう生きていないも同然。逆もまた然り——全く別の世界を、それぞれ生きている。その人生は、もう交わることはない。

「たまには帰ってこいよ」友人は京都駅のホームで、振り返らずに言った。過去の自分を叩くべく、静かに黙祷した。(出席点)

### 【書籍の価格表示変更のお知らせ】

10月から『綴葉』では、書籍の価格を、従来の本体(税抜)価格にかわって税込価格で表示することとなりました。何卒ご了承のほどお願い申し上げます。なお、京大生協組合員は、生協書籍部にて10%引きで書籍を購入することができます。ぜひご利用ください。

## 当てよう! 図書カード

今月号の特集は「翻訳」でした。ちなみに自身も優れた翻訳家であった坪内逍遙は「明治文壇幸ひにして已に三如来を得たり」として、明治文壇における三人の優れた翻訳家を挙げています。それは独文においては森鴎外、露文においては二葉亭四迷なのですが、では英文における如来は次のうち誰でしょうか。

1. 夏目漱石
2. 吉田健一
3. 黒岩涙香
4. 森田思軒

(ばや)

《応募方法》答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。ウェブサイト(<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>)からの応募も可能です。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。応募の締め切り日は11月15日です。

## 6月号の解答

6月号の問題「最も温度の低い水風呂を持つ銭湯は？」の正解は、2. 山城温泉でした。その水温は約9度と、一年中キンキンに冷やされています。ぜひ一度トライしてみてください。

図書カードの当選者は、メロンのあくびさん、地底人さん、ふくろうさん、はじめさん、よっさんさんです。おめでとうございます。

(茫漢)

## 読者からひびく

○対面授業が再開し、久しぶりに学校に来たので手に取りました。漫画特集が面白かったです！  
(法・ふくろう)

——大学に来る機会もうんと減り、すっかり日常生活も変わってしまいましたね。ちなみに綴葉は、生協のホームページからも読むことができますので、ぜひチェックしてみてください。漫画特集はとても好評でした。一口に漫画と言っても様々で、自分が全く読んだことのないジャンルのものもあり、面白いですよ。

○いつも楽しく読んでいます！ 400号おめでとうございます！  
(教育・すずめ)

——ありがとうございます！ 先輩方のおかげで400号を迎えることができました。このバトンを繋いでいけるよう、頑張りたいと思います。

○一度、編集委員の方の専門を伺ってみました。  
(理・ぱすかる)

——確かに、書いている人の専門を知ると、より書評を楽しめるかもしれませんね。現在の委員には、文学部や工学部など様々な分野の院生が集まっています。  
(茫漢)